

ラオスでの国際協力を通して見た、私（日本人）の社会と文化

Insights into My (Japanese) Society and Culture Realized Through Development Cooperation in Laos

佐藤優

Yu Sato

特定非営利活動法人 ISAPH / 社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院

Non-Profit Organization ISAPH / St. Mary's Hospital, Our Lady of the Snow Social Medical Corporation

保健医療分野における国際協力、とりわけ技術協力は「行動変容」を目的とする内容が多い。資源の限られた国・地域における高い死亡率や疾病罹患を課題として、それらを防ぐために、現地医療従事者に対する研修や医療機材を提供したり、住民組織のエンパワメントを目指した機会提供がある。しかし、多くの場合、最終的に目指していることは、それらの介入によって現地の人々の行動を変えることであろう。そのような観点から、他者の行動を変えようとする前に、「現在観測される行動がとられているのは何故か」について考えることは、図らずとも、相手の社会文化に寄り添うことになる。

本発表では、ラオス人民民主共和国における事例を紹介する。発表者が NGO 職員として携わった、2016～2019 年のラオス農村部における母子保健改善プロジェクトを題材に、ラオスの保健医療従事者や住民の行動について報告する。ラオスの人々は、穏やかな気質とのんびりとした国民性で知られているが、世界に数カ国しかない社会主義国家でもある。国としては、「人口一人あたり最も空爆された国」としても知られており、海に面しない内陸国、後発開発途上国、そして一党独裁の共和制といった特徴を有する。あらゆる社会環境が日本とは異なるラオスであるが、発表者がプロジェクトを通じて出会った具体的な事例を通して、人々がこのような社会で生まれ、育ったことが、どのように現在の行動や考えに影響を与えているか、文化的な道徳感などについて考察する。

次に、その考察を反転する形で、私たち日本人がどのような社会文化の影響を受けて、事物・事象を捉え、判断しているか、本学術集会のテーマ「イーミック・エティック」に沿いつつ洞察を広げる。日本社会にとっての当たり前は、必ずしも万国共通と見做すことはできないかもしれないこと、発表者がラオスで感じた様々な葛藤が、そのような社会文化によって築き上げられた「日本人」としての道徳に基づくものであるかもしれないことを検討し、自己文化への理解につなげる。